



小泉宗士

Koizumi Soushi

「高み目指すポールボルダー」

全日本中学校陸上競技選手権大会
男子棒高跳び 6位
米山中 3年

その瞬間、スタンドからはどよめきと歓声、そして大きな拍手が鳴り響いた。県中学校総合体育大会陸上競技大会は7月22日から24日まで、利府町のひとめぼれスタジアム宮城で開かれ、小泉は大会新記録の4.41mを跳び優勝した。「目標だった全国の舞台に立てる」。全中出場を目標に努力してきた小泉は、表彰台で満面の笑みを見せた。憧れの舞台、全国中学校陸上競技選手権大会は8月20日から22日まで、熊本市のえがお健康スタジアムで開かれた。男子棒高跳びは、20日に予選、21日に決勝の日程で競われた。予選当日、初の大舞台にも「多少緊張したが、競技が始まると自分の世界に入った」と物怖じしない。試技は4.41mから始まり、一本目でクリア。続く4.42mは2本目、4.43mは一本目でクリアと、良いリズムで跳躍を重ねる。4.43mを跳んだところで、予選通過が決定し、決勝に駒を進めた。

「ここは一本目で難なくクリアした。続く4.43mも一本目でクリア。いよいよ自己記録の4.44mへの挑戦となった。1、2本目が失敗に終わり、運命の3本目。「踏み切ってから、バーに向かう瞬間、いつもの跳躍ができてないことはすぐに分かった」。自己記録を超えることはできなかったが、堂々の6位入賞を果たした。元々サッカーをしていた小泉だが、中学校にサッカー部がなく、陸上部に入部した。正直、楽しいと思っていなかった。転機は中1の夏。棒高跳びをしていた6歳上の兄に勧められ、種目転向した。道具を使って、より高く跳ぶ棒高跳びのとりこになった。身体能力の高さもあり、その才能はすぐに開花。順調に記録を伸ばしていった。「より高く跳びたい」。誰よりもひたむきに練習に打ち込んだ。しかし、無理がたたり腰椎分離症に。大げがを乗り越えての全中出場だった。「高校では、全国の舞台でさらに上位入賞を」と今後の目標を語る小泉。貪欲なまでに高みを目指し、挑戦する姿勢は、これまでも、これからも変わらない。



「目標実現するハードラー」

全国高校総合体育大会
陸上競技大会 100mハードル 4位
柴田高 2年(中田町本町畑中出身)

及川優花

Oikawa Yuka

「当初目標の決勝進出は果たしましたが、メダルを取れなかったことが悔しい」と今回の結果に満足していない。全国高校総合体育大会陸上競技大会は7月29日から8月2日まで、山形県天童市のNDソフトスタジアム山形で開かれた。自身2度目のインターハイ。昨年は予選敗退に終わり、今年は「決勝進出」を目標に練習を重ねてきた。4月に腰を負傷し、万全でないながらも優勝した県大会。故障から明け、14秒08と自己ベストを更新した東北大会。本番を前に、徐々に調子を上げてきていた。しかし、前日練習では浮かない表情。及川は「ハードル間の走りがイメージより遅い」と花沢元監督に訴える。花沢監督は「ピークをうまく合わせられなかったか」と思ったが、「本番になれば大丈夫」と及川の背を押した。迎えた予選、及川の不安は無用の心配に終わった。課題のスタートはまずまずの出来。後半に得意のスパイトで、14秒08の自己ベストタイをたたき出した。及川は「少しプレッシャーを感じていたのかもしれない」と振り返る。

心身ともに、上り調子で臨んだ準決勝。「ハードルを超えるときに、上に抜けない」よう、上半身の前傾を意識して走った。結果は13秒98で全体4位。「準決勝では13秒台を狙っていた」。大舞台でも臆することなく、自己ベストを更新してみせた。「ここまで来たら、メダルを持ち帰る」。決勝進出、自己ベスト更新と2つの目標を達成した及川。さらに一段上の目標を設定した。仲間や家族などからの声援を受け、決勝が始まる。「スタートで離されても、いつも通り、焦らずに後半追い上げる」。自分の走りだけに集中した。自身の感触は悪くはなかったが、周りはスタートから一気に飛び出す。6台目のハードル付近から、爆発的な加速で追い上げたが、メダルにはわずかに届かなかった。「監督、仲間や家族など、多くの人が応援してくれたことに答えられなかった」と唇をかむ及川に、「大会前の全国ラッキンクは14位。よく努力した。今回の結果は立派な出来」と花沢監督は目を細める。「来年は絶対にメダルを取ります」。及川の目はすでに、東海総体を見据えている。